

と連なりて、眞如の月影を宿し、前には生死の海漫々として、浪煩惱の垢を濯げば、無比の罪障も消滅すと覺えたり、本地は文珠菩薩なり、兄弟一心に祈り奉りしかば、大事を明さず候も、別當の言葉こそ御托宣と覺えたり、其上権現より、一口づゝの銘刀を賜はりしやらんと、十郎、五郎は、行實阿闍梨に別れ、駒を早めて勇みに勇んで箱根を越えて、早くも三島明神の前にぞ着にける、茲で疊ふ紙を挟み、七番づゝの笠懸を射て奉納をいたし、祐經を討つ事叶はずば敵の手に掛り、足柄を再び東へ歸し給ふなと念じます、さて兄弟は之より浮島ヶ原に至り、御狩の模様を窺ふに、實に六十餘州の武士を集めたる事なれば、誠に前代未聞の事どもなり、先づ従がひ奉つる人々は、武藏國の住人、畠山庄司重忠、和田左衛門尉三浦の義盛、三浦の介義澄、下總の國にては千葉の介常胤、古郡新左衛門の尉兼忠、竹田の太郎信吉、下野の國には宇都宮彌三郎友綱、横山右馬丞、相模の國には松田の十郎、川村の五郎を始めとして若武士には畠山の六郎重泰、梶原源太景季、朝夷の三郎義秀、同じく彦太郎、御所の太郎、同じく御所の五郎丸、森

の五郎、林の四郎、小山の三郎、葛西の六郎、板垣彌二郎、本間の彦七、澁谷の小四郎、愛甲の三郎、仁田の四郎、北條、工藤、佐々木等總て馬に乗り、弓矢持てるもの百萬餘人なり、源二位頼朝公其の日の扮装は富士松の風折したる立烏帽子、柳色の御狩衣大紋の差抜に熊の皮の行障褌長に召され、連錢革毛なる駒の五尺に餘れるに白鞍置かせ、厚總の鱗掛けてぞ召されける、御劔の役は江戸の太郎、御傘の役は豊島の新五郎、轡の役は小山の五郎、御敷皮は金子の十郎なり、其外一騎當千の者六七百人御馬の廻りを取巻き最と嚴重に見えたり、後陣の左右には和田、畠山何れも鷹を据ゑたりけり、其の外數千騎の人々花を折り月を招くの粧にて富士野廣しと雖も餘す處なくぞ見えにける、勢子は山上山に入つて、猪、鹿を追出します、東は愛鷹の峯、西は富士川を界として鯨波の聲天地に響き、追立てれば面々能き手柄して御威に預らんと走り出で、射て落すが中にも畠山六郎重泰、大鹿二頭仕止めたり、宇都の宮彌三郎も同じく五頭、一條、板垣、竹田、小山の人々五頭こそ仕止めける。茲に葛西の六郎清重は日の暮方に至るまで鹿一頭も止めずし

て勢子に漏るゝ鹿もやと茂み／＼に眼をかけて彼處此處と廻りしに折節右手の茂みより鹿一頭飛出し走せたりけるを、願ふ處と見渡せば、矢垣は少し延びたれば鏡に鞭を打ち添へて下りざまにぞ落しける、既に二三反切り違へて弓打ち上げて曳かんとする處に馬の走りの前下り、谷に出張りし岩石に馬乗り上げて心付けば這は開も如何に、這は如何に、馬は四足を一つに立て兼ねて慄きてぞ立たりける、下ろすべき様もなく進退茲に谷まつたり、上下の數々萬人、之を見てあれよ／＼と申しける、今は馬人共に微塵になるとぞ知られたり、前面をキツと望み見れば下は幾千丈とも無き谷にして底も知れざる處なり、左右に馬も駈場はなし、葛西の六郎心にキツと思案をなし、手綱靜かに取り一つ二つの捨手綱、一鞭加へて飛下る、馬は手綱を捨てられて眞砂に連れて落ちて行く、六郎如何にと見てあれば岩角に弓杖突いて踏み止まり、遙かに落ち行く馬を見やりつゝ、ヌツクと立つたる有様は諸人の目をぞ驚かせけり、乗つたりや葛西、下りたりや六郎、据たりや堪へたりやと、諸人どよみを作つて暫時は鳴りも鎮まらず、ヤンヤ／＼と寝めにけ

り、頼朝公御感の餘り常陸の國小栗の庄に於て三千七百町を下さる、時の面目、日の功名、何事か之れに過ぎじと感せぬものこそなかりけれ、斯る處へ上の茂みより鹿一頭出で來り、梶原源太が控へたる左手の方を駈け通りてぞ下りける、景季見るよりも猪矢を打番へ切つて放てば追ひ様に、筋違ひに首筋掛けて射抜いたり、されども鹿は物ともせず、思ふ茂みに飛下る、源太二の矢を番へて追ひ行く時に、馬は餘りに追ひ立てられて、前脚を折らんとするを、乗直さんとする間に、鳥山の六郎重泰、駈け駈んで切つて放つ矢、忽ち源太が矢目の羽切りまで射たりけり、流石の鹿も二の矢で止りましたから、重泰、景季、互ひに駒を打寄せ來つて、源太が源此鹿こそ景季止めて候ぞ」といへば重泰が重「這は心得ざる事をいはるゝものかな、鹿は斯く申す重泰が矢一ツにて止めたるを、誰人か主のあるべき」と諍ひとなりました、此の時源太が弓取直して冷笑ひ源「狩場の法は定められ、一の矢、二の矢次第あり、矢目は二つもあらばこそ一二の論もあるべけれ、景季も正しく射つる物を」と駒を下つて兩人之れを檢めて見れば、實にも矢目は一

つならでなかりけり、梶原源太は見すく自分の射たるものを、而も御前に於て人
 に取るゝとあつては、今日の耻辱と思ひますから大音揚げて源「勢子の奴輩はな
 しか、寄つて此の鹿を取れや」といへば重泰も大音に重「雑人はなきか、重泰が
 止めたる鹿持て」と呼はりました、源太もさる者なれば少しも怯まず源「臆した
 る奴輩かな、景季が止めたる鹿の皮、はいで取れ」と罵れば、重泰も駒駈廻し
 て重「雑色共は、など鹿を取らぬぞや」と互ひに怒氣を含んで争そひます、時
 に源太は手綱搔繰り駒打寄せて小聲にて言ふやう源「戀路に迷ふかくし文、遣る
 者こそ主にて候よ」重泰答へて重「優しくも宜まふ例かな、思ひの色のかす夜ま
 で、空しく返すには返し得たるぞ、主となり」源太打笑ひ源「吉野立田の花紅葉、
 誘ふ嵐は主ならずや」重泰聞いて重「言はれずや、誘ふ嵐も其儘に、遂に連れて
 も行かばこそ」と宣まふに源「立田の川の川波は、散りて流るゝ花の雪」重「紅
 葉の錦渡りなば、仲や絶えなん、さりながら流れて止まる處こそ、誠の主と思は
 るれ」源「實にゆるあつて聞えたり、波にもつれて行かばこそ、斯るのせきも主

なるべき」重「のせきも止め果てばこそ、流れて止まる湊こそ、眞の主と覚えけ
 れ」源太此の言葉打捨て、源「更け行く月の傾ぶくも、眺むる者こそ主となれ」
 重泰高らかに打笑ひ重「世界を照らす日月を主と宣まふ過分なり」源「過分は人
 に依るものを、御分一人に返すかとよ」重泰堪へ兼て重「一人に返すか返さざる
 か、手練のほどを見せ申さん」と已に矢を抜き出すに、源太も同じく堪へ兼ね
 源「案の中よ」といふ儘、已に中差抜き出す、茲に於て梶原の郎黨は言ふに及ばず、
 時の綺羅、梶原に及ぶ者なかりしかば、知るも知らぬも押なべて、梶原方へと走
 せ寄する、三浦の人々之を見て秩父が方へと付きにける、兒玉の人々が梶原方へ
 寄れば、本間の人々は秩父が方へと寄り来る、駿河の人々は梶原方、伊豆の國の
 人々は、北條を始めとして秩父が方、安房と上總の武夫は、二つに分れ、常陸下
 總の人々は秩父が方、阪東八箇國のみならず、狩場に居合す武士は直犇めきに
 犇めきけり、畠山次郎重忠は、初めより此の有様を知つて居りますが、素知らん
 態をして立寄りません、會我の兄弟は之を見て、あはれ事の出来よかしと、加擔

人する風情にて祐經を狙ひ寄り、本意を遂げんと身構へたり、頼朝公之を御覽じて頼「ヤア義盛は居らざるか、那れ鎮め候へ」といふ仰せに和田左衛門尉が左「心得て候」と双方の間に馬を乗り入れて左「上意なり、鹿論の事互ひに其の理あり、鹿をば上へ召され候、兩人とも御前へ参られよ」と大音に呼はりまして、鹿を勢子に擔がせ、六郎と源太景季の兩人を連れて御前へ出ますと、頼朝公が頼「義盛、夫にて此の議論を決し候らへ」と仰せられました、義盛畏こまして、鹿の傷を能くく「檢ため左「某がし思ふに、一の矢は源太がいたし候ひしを、二の矢は六郎射止めしならんと存じ候、六郎の矢は止まりて現在なり、又源太の矢柄抜けたれば、失せて證はあらざれども、六郎が二の矢の一つ矢目を射たるがゆる、鹿は二の矢に止まりつらん、源太が一の矢せし證據は射抜きし迹の證あり、六郎が矢尻の抜けて此方へ見えざれば、之こそ證と申すべし」といふ、頼朝公も頼「勇士の矢目の遠はざる弓勢、誠に天晴なり」と御感の言葉、鶴の一聲で兩人の諍ひは茲で終りました、一同の人々は之を聞きまして「イヤ流石は和田殿の鑑定、尤ともなりし

と感服をいたす、又中には「梶原は剛い、一の矢を射た、六郎は人の抜穴を狙ふなど、は宜しくない」と、なんと、狩場の取沙汰でございませう、茲に會我兄弟が敵工藤祐經を追ふお話し。

第十六席 仁田四郎猪退治

さて會我の十郎祐成、五郎時致の兄弟は、梶原、畠山の鹿論、アワヤ大事になるべき有様なるに力を得て、事あれかしと待構へて居りますと、其の中に和田義盛の扱ひで何の事もなく納まつて了りました、さて「残念の至りと、拳を握つて兩人が、那方此方を徘徊する中に、其日も暮れましたから已むを得ずして、空しく假屋へ立歸りました、頼朝公に於ては其の夜御假屋に於て御酒宴をお催ふしになり、山の神祭りといふのを遊ばされました、さて翌日になり、又々富士の裾野を取巻きまして狩り立てました、スルと茲に後藤庄司景満といふ當年七旬に餘る弓取の故實に精しく、射術双ぶ者ないといふ人、適かに向ひの方から馬より大き

な鹿でございませう。砂石を飛ばし眞一文字に飛んで参りましたが、馬武者を飛越え跳ね越え、駆け来る有様、徒士立の歩卒を七八人駆け倒しましたる事にて、此方を差して飛で来る、庄司景満之を見て、能き獲物御参なれ、イデ射止めて呉れんと、一の矢を引絞つて切つて放つたが、狙ひ狂つて射外しました、残念なりとあつて二の矢を取つて切つて放つ、遙かに射越した、這は無念と、三の矢を射放つと、迥かの傍へ射外して了つた、鹿は元の茂みへ飛込んで了ふ、景満弓をガラリと投げ捨て、天を仰いで歎息をして、我十一歳の昔から狩を好み、今七十歳に及んで如何なる者も遂に射損じた事はない、然るに今三度まで射外すといふこそ不思議なれ、第一我が心ボンヤリとして了ふたるは、必定山の神の怒り給ふに疑がひなし、然らば我が命も最早限りあらん」といつて其晩假屋へ歸ると大熱を發し、遂々相果てました、其の臨終の時に至つて、婿の仁田の四郎忠常を招き、我れ口惜しくも鹿を射損じて命を終る、最早存命は叶ひ難いから、跡の事は何分汝に頼む」といつて七十三歳で相果てました、仁田の四郎忠常が之を聞いて、イヤ怒

つたの何の、昔から古き獸を射損する時は、必らず跡で祟るとか、併し君命でいたすに、神にもしろ、獸の姿なれば人間に及ぶべき、近頃奇怪至極と足踏鳴し、又出来れば、假令雷神なればとて、仕止めべきものをと、イヤどうも非常な立腹、聽て其の翌日は殊の外晴天、未明から勢子を入れました狩り立てる、勇士の面々得物くを引提げ、君の御恩賞に與からんと、走せ廻りまする、其の日丁度午の刻少し過と覺しき頃、一匹の大猪が現はれまして、砂石を飛ばし、牙を鳴して、昨日の鹿に一かさまさつた有様に、イヤ勢子の面々之を見ると、ソレ大猪よと八方に崩れ渡る、坂東八ヶ國の若殿原、我射止めんと八方から射掛ける矢は雨の如く、なれども矢柄が碎けまして刎ね返つて了ひます、猪は益々猛り立て、徒士、馬武者の嫌ひなく、拯つて掛け上げ、五間十間づゝ刎ね上げまして、勇士の面々散々に掛け立てられ、手に餘つて見えませんでした、竹の下の子孫八左衛門何程の事やあらんと、走せ掛りまする所を、馬人共に牙に掛け、宙天に投げ上げましたから、命辛々引退ぞきました、土屋の八郎は尻皮を掛けられまして、後へに倒れまする、跡は誰

も出でません、仁田の四郎忠常此の體を見るといふと、スワこそ大猪御參なれ、と弓に矢番へて引絞りましたるから、頼朝公之を御覽あつて頼「忠常能くこそ仕つれ」とお聲が掛つた、四郎忠常承はつて四「人こそ多き其中に、斯様なお言葉を被むる事、生前の面目何物か之に過ぎん、假令鐵の猪來るとも餘さじものを」と、大の猪矢を抜き出し、只一矢にて、よつ引き固めて射放さうといたしまする處へ、矢よりも早く飛び込み來つた彼の猪が、乗つたる馬も主も諸共に、宙に揺つてドーンと投げ上げまして、落ちなば投げんと狙つた、仁田の四郎忠常今は之までといふ、弓も矢も投げ捨て、落ちながらに猪の脊中へ乗り移りました、なれども咄嗟の間に乗たのでございませすから、猪の後ろ向に乗て了つた、猪の尾筒をシツカと引掴み、左右の足で猪の太肚をウーンと挟みまして、只落ちまいといふ一心、スルと猪は乗られたから彌と怒つて、馬を掛け倒し、雲を霞と飛んで參ります、忠常は伊豆相摸に雙びなき大力、殊に荒馬乗りの達者でございませすから、猪の太肚をシツカと締めて、猪の尾筒を搔捉んで、堪へて居るが中々どうも堪へ切

れません、猪は彌と猛り立つて、木の根、岩角の嫌ひなく、茨、枳殻の中を宙を飛んで行く、其内に流石の猪も疲れたものと見えまして大きに弱つて來ました、伏木に躓つて踏躓きまする處を忠常得たりと短刀を引抜きまして、猪の太肚へズバツと刺して、肋骨を二三枚、バリ／＼と搔切つたから、さしもの猛獸も之では堪りません、四足を四五寸大地へメリ込まして途々茲に往生をいたしました、ホツと一息ヒラリと飛下つた忠常、止の刀を刺して突立つた時に、數萬の人々之を見て「前代未聞の振舞かな、乗つたりや、堪へたりや」と皆一同に譽め立てまする事、暫時は鳴も止みません、頼朝公之を御覽遊ばして頼「狩場の中の功名は是に如かじ」と富士の下方に於て五百餘町を賜はりまして、忠常に於ては面目を施しました、さて頼朝公は毎もより今日の御狩は悉く興に入らせられました、殊の外御機嫌麗はしく御座在せられました、中に梶原源太景季は、更に獲物がございませんから、那方、此方を走せ廻つて居ると、一匹の鹿が出でました「御參なれ」と走せ寄りまして引固めて放つた矢が、鹿の上を過かに射越して飛んで行つて了

つた。此時に源太は流石名代の歌讀みでございますから、
夏草の茂みが下を行く鹿の

すそに行く矢は射にくかりけり

と高らかに呼はつた、頼朝公之を聞き召され、天晴神妙なりと、富士の下方に於て百餘町を賜はつた、鹿を射損じて此の人は御恩賞に與かりました、況して能く仕止めたらば、如何なる御恩賞のあらんも知れませんが、ソレ源太に負けるな、劣るな」と皆一同の人々が我れもくと討つて出ます。

スルと此中に曾我の十郎、五郎の兄弟は、何卒して敵祐經に巡り會んと心掛け、少しの油断もございませぬ、十郎其日の扮装は、萌黄匂ひの裏打つたる竹笠、群千鳥の直垂に夏毛の行膝、重藤の弓の真中を取り、鴻の薄羽の矢、等高に取つて着け、葦毛の駒に具鞍置いてぞ乗つたりける、弟五郎時致は薄紅の裏打つたる竹笠を真深に戴だき、唐さらみに蝶を付けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行膝豊やかに穿き下し、鶴の元白の征矢を等高に脊負なし、二所藤の弓の真唯中を取つて鹿

毛なる駒に時繪の鞍置いてぞ乗つたりける、五郎四邊を見廻せば、迥か彼方に三頭の鹿、勢子を破つて走り來るを、面々射取らんと追ふ中に、一際目立つ龍の直垂に、大班の行膝、切斑の、矢を脊負ひ、吹寄藤の弓の真中を取り、金紗にて裏打つたる竹笠を嵐に吹き靡かせ、黒き馬の、太く逞ましきに白覆輪の鞍置いてぞ乗りましたは、是なん、敵工藤祐經でございます、五郎之を見るより、扱こそ天の與へと打喜こび、兄十郎に目配せして馬に鞭ち、無二無三に飛ぶが如くに追ひ驅けまする、十郎此の時聲を激まして十「ヤア此の鹿は、埒の外に勢子を破りて落るにやあらん、追返して奉るべし」と言ひながら十三束の大の中差押取て打番へ、心の中に、矢所多しといへども、奥野の狩場の歸途に、父の射られし鞍の山形の外れ、行膝の引合せ、報を知らする恨の矢、餘の所を射べからずと、左手になしてぞ下りける、五郎も同じく中差取つて打番へ、左衛門が首の骨、如何に金鐵なればとて、など志しの通らざることあるべきかと、鞭を籠に添へて右手に付いて走せ並ぶ、兄弟兩人、三ツの鹿と祐經とを中に取込めて彌よ急に追立てました、

十郎矢頭は宜しと心の中に神を念じ、キリ／＼と引絞つて切つて放たんとする途端、祐經暫時の運やあつたりけん、伏木に馬を乗掛けて前脚を折つたれば、十郎は馬より筋斗打つてドーと落ちました、之を見るより五郎は大いに驚ろき、夫へ馬を走せ寄せまする間に、祐經は廻かに離れて了つた、五郎空しく引返して参りまして、兄を介抱いたします、十郎が此時に「我等ほど敵に縁のなき者はなし、今こそはと思ひしに、馬倒れて取逃したり、あはれ此の馬の強くんば斯る不覺はあるまじきに、是も貧より起ること、貧は諸道の妨げ、人をば怨むべきにあらず」といふ、五郎之を聞いて「五兄上最早斯くなる上は是非もなし、何萬人あるとても切込んで當の敵は左衛門一人、支へるものは切り拂ひ、本意を遂げ申すべし」といへば十郎が「イヤ／＼今暫らく待つべし、夫泰山より滴る水は巖を穿ち、釣瓶の繩は井桁を切る、水は石の鑿ならず、繩は木の鋸ならず、皆堪忍のいたすところなり、只心を鎮めて時を待たん、是より狩場の模様を探らばや」と互ひに馬を引寄せて、連立つては人の目に立ちますから、十郎が左りを行けば五郎は右を行き、

一人が先、一人が跡、心を付けて参りました、所へ彼方から参りましたのは梶原源太でございます、ア、悪い奴がと思ひましたが逃げる譯にもならず、鎧を外して一禮をいたしますと、源太から聲を掛けて「源イヤ之れは曾我の殿原でございますか、能くこそ此度は御供いたされた、奉公はお互ひに同じ事、如何さま此度君鎌倉へお歸りに相成らば、お許を被むり、本領をも得給はん、御狩も最早近日相濟むでございます、各々方も早く本國へ歸られて、能き御沙汰を相待たれよ」といつた、十郎之を聞いて心の内に、人は言葉を以て其の賢愚を知る、狐の子は狐なり、我々何の功あつて本領を得べき、之れ我々を欺むくに過ぎず、人は巧にして偽はらんよりは、拙なうして真あらんには如かじ、扱も心憎き奴とは思ひますが、何にいたせ當時の巾利でございますから「梶原殿、何分にも御前宜しなにお取持頼み存する」とさりげなく挨拶に及びました、時に

またしきに色づく山の紅葉かな

この夕暮を待て見よかし

といふ聲、源太思はず振返つて見ますと、畠山の次郎重忠だ。源「イヤ之は秩父殿に候か、曾我の殿原にまたしきに色付くと詠じ給ふは心得ず」と言ひますと重忠が重「夏山に夕日の影の差残る風情、初紅葉に似て候はずや、此の夕べこそ移り行かば、誠秋にや行かん」源太は心得ず、不審顔をして源「またしきにく」と繰返して居りましたが、不圖心付いて源「イヤ思はずも君のお召に後れ申せし」と其儘に走せ出しました、跡に残つた畠山次郎重忠が兩人に向ひまして重「殿原も、久しき狩に草臥やし給はん、今宵は重忠が所へ來り給へ、歌物語いたさん」と言ひ捨て行き過ぎます、其の夜兄弟が畠山の陣へ參つて、重忠の計らひで榛澤六郎が假屋の案内をいたしたといふ説もございしますが、之は如何なものでございませうか、畠山が茲でそんな事を言ふ譯はございませぬ、之は祐經を討損じて兩人が假屋へ歸つて來まして、夫からも尾けて居るが、どうしても討つ時がなかつた、空しく日數を送る中に時恰かも五月雨時でございまして、四五日とふもの、毎日々々雨ばかり降つて居ります、狩場の興がないので、畠山庄司重忠が假屋へ

郎黨を集めて酒宴を催はして鬱を慰めて居ります、處へ梶原平三から觸狀が來る、明日二十九日御出立になり、明後日鎌倉へ御歸りになるといふのだ、之を見まして重忠が、豫て曾我兄弟の狩に見えたのは、かねての望みを達せんとの事である、鎌倉へ歸つては逆も討つ事は出來ん、ヤレ／＼氣の毒千萬な、重忠も若い子を持つて居る、人の事とは思はれん、明日鎌倉へ在せられる、今宵を過しては討つ事は出來ん、兄弟は知るまいから知らしてやらうといふので、榛澤六郎を招ぎ、一瓶の酒を贈りました、其に一首の歌を添えましたのが

またしきに色づく山の紅葉かな

この夕暮を待ちて見よかし

といふ、鎌倉へお歸りになつては豫ての望みも達せられまじく、最早今宵限りである、若し又木戸の通れぬ時は重忠が家臣と申して通られるやうといふ、懇ごろに認ためてございしますから、兄弟は涙に暮れまして十「毎も／＼重忠殿の御厚情、生前には報じ難く、誠に有難い事でござると厚く禮を述べまして、榛澤六郎を歸

しました、茲で兄弟兩人が今宵限りといふので、島山の陣へ来る、榛澤六郎が祐成の假場の案内をいたす、會我の紋散しに移ります。

第十七席 紋ぢらし

會我の兄弟は、島山の知らせを聞いて十「重忠殿が情けを以て斯ういふて来た、書き送られた歌の心は、思ふ事あれば今宵限りといふ、上には明日御出立、明後日鎌倉へ御歸りとあれば、我々が命も今宵限りである、珍らしくも思ひ定めて候」といふ、時致素より剛の者でございしますから五「言ふにや及ぶ」と茲で彌よ今宵敵を討たんと覺悟を極めました十「さて豫て思ひ込みし事だから、今更心細いとは思ひ申さんが、夜中の働きゆる、案内知らずば不自由ならん、晝間の中假屋の様子、並びに敵工藤の館を見知らんと思ふが、二人連れて参るは人目立つ、我一人参るに依つて、我が歸りまでは、必らず他へ出給ふな、假令如何なる事のありとも、我一人にては本懐は達すまじ」と茲で祐成只一人で立出でまし

た。

丁度二十八日の正午過でございします、折節雨の晴間井出の館に差掛ります、出て参りましたのは榛澤六郎成清六「之は十郎殿何れへお出であるか」十「されば、先刻御沙汰下さいました、彌よ、當地の滞在も日がなくなりました、只今の中、館の様子を拜見いたさんと罷り出ましてございする」榛澤六郎之を承はつて心中に、扱は今宵思ひ立つたる事あればこそ、参られたるものだと思ひますから、六「能き折柄に御目に掛つてございする、然らば僕が案内いたすに依つて、サア此方へ」と先に立つて榛澤六郎、井出の館の此方一段小高き所に案内をした、適かに見渡しますると、眼の下に假屋がズツと見えます、流石に日本六十餘州の總追捕使、源家の正統頼朝公が威勢盛んの頃でございしますから、其の假屋の多い事は實に眼も眩むばかりでございします、榛澤の六郎成清が、扇を笏に取つて六「如何に會我殿、此所より一通り案内いたすべきに、能く御覽あられるやう遙なる五月雨の小止む時間より、一際高く北山に添たる御家形こそ、一天計る、二十八宿、

間取むらなく打廻す笹龍膽の幔幕は、源二位殿の御座所なり、御家形の左に當つて三つ鱗せし幔幕は、是ぞ桓武の後胤、常陸の大掾、國香の末孫、當時鎌倉に時めく有様は金龍の昇天なす計りなる北條四郎時政なり、御家形の右に續きて白地に三つ引龍は、虎も恐れて三浦なる、九十三騎の大頭領にて、和田の左衛門義盛なり、後へ三十六間を離れて建たる假屋こそ、玄武を象る龜甲に黒の山道染出したる愛甲の三郎維俊なり、續いて西に入合の月星出せし紫に並んで白地に黒き馬二匹繫ぎし定紋は、千葉が次男の相馬六郎、同く東の上の方、出る日の丸に五本骨、招く扇の幕張は、佐竹の冠者義元なり、此の三頭の大名は、是皆二位殿の御後を守護の假屋なり、さて目の下に見えたるは、御屋形守る前朱雀、夜明に近き紅に、竹と雀は中村念齋、續く左の宿木に鳩の八文字、紺地に黒く出せしは、武藏の國にさる人ありと知られたる、士頭の旗頭、熊谷の次郎直實なり、右の幟に總黒へ白く引龍見せたるは里見が冠者の假屋なり、又眼の下に一の木戸固め厳しき東なる、角に打つたる幕張に、花菱繁く出したるは、大内の冠者義廣なり、向の

角は濃紅に第一大萬大吉と白く抜きたる大幕は石田の判官爲成なり、淺黄に白き釘抜と黒き釘抜出せしは、三浦が黨に勇猛の、名も荒次郎義澄なり、立並んだる柿色に松川菱を付けたるは、三浦の平六義村なり、庵の内に女龍男龍向ひ合して付けたるは、竹の下孫八左衛門なり、菱四ツ寄せて菱なるは、武田の太郎信重なり、一條板垣、下山邊見、南部仁科は一門にて、紋も同じき武田菱、紺地に日の丸の紋處は、寺尾の新田大炊の介、白一文字、黒一文字、淺黄の内にしは須藤瀧口兄弟なり、大砂垣は安田の三郎、三蓋菱は加賀見の次郎、さて木戸の塞際に、白地に左巴して、黒の山道付けたるは、關の東に勇名懸きし、宇都の宮彌三郎友綱なり、右の角は水色にはのめき渡る弓張月、露の玉散る亂星綺羅美やかなる假屋こそ、千葉の介常胤なり、赤地に五七の桐付けしは主人の島山六郎重泰、白地に賢き軍配は兒玉の一族、庄野の太郎、雨にふり好き三本笠は、名高き名古屋尾張の守、開き扇は淺利の與市、二つ瓶子は川越の太郎、三つ瓶子は宇佐見の三郎、四つ大筋出したるは、金子の十郎近家なり、右り巴は小山の判官、二つ巴は岡部の六彌

太、三つ石疊は土屋の大學、四つ石疊は同じく次郎、淺黄に紺の水車は土肥の彌太郎遠平なり、御免と見えて總白へ、一文字を出せしは、久下權の頭が假屋なり、龍膽車は信田の小太郎、近島行方藥科なり、さて又堅き三の木戸、紺地に三つの大文字、二枚の矢筈附けたるは、梶原源太景季なり、木戸の内なる同じ紋、白地へ黒く出したるは、父の平三景時なり、親子前後を備へしは非常の爲と知られたり、其れに續いて柿色にいたら貝を出せしは岩永左衛門宗連なり、六連錢の定紋は甲斐源氏の棟梁なる海野の小太郎行氏なり、風折烏帽子、立烏帽子は比企の判官豊島の冠者、紺地に立浪出せしは、葛西の六郎清重なり、あさら貝は安西の彌七、はなだの幕は横山の十郎、相馬に見紛ふ二匹馬は、仁田の四郎忠常なり、朽葉に菊を附けたるは關の太郎と知り給へ、割し桔梗は玉井の十郎、牡丹に獅子は秋田の一流、白地に車を見せたるは濱の龍王の末孫にて、齋藤一家に候なり、菊一文字は那須の與市、大文字は江戸の太郎、三つ巴は結城七郎、花橘は山本の、柏木判官行元なり、澤瀉流しは上總の助、引龍違ひの定紋は、島津の冠者と覺えん

たり、劔花菱は小笠原、花劔菱は名取の八郎、山道に三筋出したるは、三島の入道萩野の五郎、龜甲輪違雪折笹は八田小野寺岩城の十郎、さて本營の左りなる向ひの角に紫に、白く四つ目を出せしは、佐々木四郎左衛門丞、大老高綱なり、御屋形左の假屋こそ、秩父鉢形花山三ヶ城の主たる、畠山の次郎重忠なり、佐々木の地尻、北條と向ひ合ひたる幕張は、足立藤九郎盛長なり、さて又畠山の地尻なる、和田殿と向ひ合ひたる、白地に黒き山形の庵の内に木瓜を染出したるは是れを名に負ふ伊豆の住人、工藤左衛門の尉祐經なり、必ず見違へあるべからず」と實に老功の榛澤が最と詳かに物語ります、祐成大きに喜こんで「誠に能うこそ御指南下し置かれ、篤と記憶いたしてござる、罷り歸つて時致に申し聞けん、嗚かし舍弟も喜こぶ事にて之あらん、宜しく畠山殿へ」と右と左りに別れ、祐成は唯一人、那方、此方と段々廻り廻りて來ると、庵の中にニツ木瓜の打つた幕張の館がございます、ハテナ、之は我が家の門だ、已に伊東の家御敵となつて潰れて了ひ、今伊東を名乗る者は一人もない、此の紋の幕を打つべきものはない筈だが、誰かしら

んと、不審に思ひまして立寄つて見ると敵工藤左衛門祐經の館でございませう、何だ、彼は二ツ木瓜の幕を打つべきに、庵に木瓜は心得ざるものかなと暫時立停つて見て居りましたが、之は其の祐經が伊東の五ヶの庄を頂だきまして、伊東の主となつたから改ためましたので、祐經は備前の吉備津の宮の神主、大藤内といふものと酒を呑んで居ります、祐經の嫡男で犬坊丸が目早くも祐成を見付けまして犬「父上様、十郎殿が通られます」祐「ナニ天野の十郎か、横山の十郎か」犬「イエ、會我の十郎殿が通られます」祐經之を聞いて、何か考がへたものと見えて祐「之は祐經の館である、申す事のあり、立寄り給へと案内いたせ」ハツと答へて犬坊丸が表へ走せ出でまして犬「之は祐經の館でございませう、お立寄りあるやう」祐成之を承はつて、敵に言葉掛けられて隠れんも意氣地ない、幸はひに館の案内を見て置かんと、大膽にも館へ入つて見ますと、正面に控へましたのは左衛門尉祐經、其の傍はらに客人と見え、大藤内が控へて居ります、手越少將、喜瀬川の龜鶴といふ遊君二名が其の傍はらにあつて酌を取り、嫡子犬坊丸が其の

前に控へ、酒宴の最中、祐成其の席に着くと、祐經敷皮を取つて祐「之へ」といふ十「イヤ之にてトンと苦しからん」と其儘で挨拶が終つた時に、祐經十郎に向ひ、會我の文章に、祐經其の言葉の荒かりけるといふのは茲だ、一伸び伸上つて祐經が祐「誠や殿原は祐經を敵と宣まふ由、夢々人の言へるを用ひ給ふべからず、讒言と覺えたり、尤も其頃我等が領すべき、葛見の庄を伊東殿が領し給ひしゆる、六波羅に訴たへ、裁判にはなつたれど、怨みは一旦の事なり、其儘に相成つたるは、第一に伊東入道殿は祐經が爲めには養父なり、第二には伯父なり、第三には烏帽子親なり、第四には舅なり、第五には一族中の長者なり、されば祐經が爲めには一方ならざる者なれば、其儘に過ぎ行きたり、又面々の父河津殿奥野の狩の歸途に討たれ給ひしは、股野の五郎を相撲にて、再び三度打ち負し給へる意恨にして、大庭股野の兄弟が遠矢に掛けしと覺えたり、其の折柄に我等は程遠き都にあつて事の次第更に知らず、然るに我等が二なき郎黨を多く討ち給へるは、伊東殿の無法と申すもの、我等其時對決せば宜しかりしを、養父なればとて打捨て

置きしに、幾ほどもなく當御代となり、殿原も祐經も斯く相成つて候ぞ、長き年月の間、祐經が爲したる業なりと思はるゝは、祐經に取つて心外といふも餘りあり、能く知り給へ祐成殿。祐經決して虚言は申さじ、弓矢神も照覽あれ、此事構へて偽はりなし」と申します時に、祐成承はつて、更に言葉もございませぬ、只畏まつて聞いて居ります、暫らくして祐經が傍はらを振返り、祐「之なる客人を見知り給ふか、之は備前國吉備津の宮大藤内とてさる人なるが、今年まで七年、君の御不審を被むり、所領を召されて居りたるを、此の三ヶ年祐經取持ち御免を被むつて所領安堵いたし、蒲原まで上り給ひしに、祐經に名残りを惜まんとて是まで來り給ふなり、斯様に他人ですらも宜きやうに計り申す祐經、況して殿原は我等の従弟といふものなれば、今は親とも思ふべし、互ひの意恨を止めて、今より親子の契りたる盃いたさん」と祐經大杯を上げて先づ大藤内に客人だからとて始めませ、其の盃を珍らしきといつて十郎へ差した、十郎呑んで少將に差す、其の盃を十郎へ差し、又龜鶴へ差しました、龜鶴が呑んで十郎へ差す、此時に祐經

が祐「いかに十郎殿、我等鎌倉へ歸りなば、御分等をも大藤内殿の如く、御前の氣色を窺がひ、御奉公もあるべきやう取計らひ、一ヶ庄をも賜はり、馬の草飼所をば持ち給ひ、無祿にて賢人顔をせんよりも、我々睦みて若き者共に背かず、世送りし給へ、面々が馬の態を見るに、瘦せ弱りたる様子、幸はひ伊東に馬も多く候へば、乗り付けて乗り給へ」と妙に言つた、十郎此時に、汝れヤレ祐經め只一討にとは思ひましたが、イヤ、兄弟諸共にとの約束なるに、此の所に我祐經を討ちなば五郎の嘸や怨みなんと、心を鎮めまして、思ひ止まつたが、祐經は夢に知りませんから祐「十郎殿、其の盃を干し給へ、御前達數多居ることなれば、香をもち給ふと覺えたり、コレ、今様を」と言葉の下に二人の遊君は扇拍子を打ちまして

蓬萊山には千歳經る、千秋萬歳松の枝に鶴巢くひ、殿の上に龜遊ぶ

と繰返し、五遍まで誦みました、十郎其の時に盃を上げ三ツまで干しました、祐經が祐「其の盃を之へ」といつて取上げ、祐「方々は何とか思ひ給ふか知らねども、今

日より親子の契りたるべき、之なる童を弟と思ひ給はれ、犬坊汝は兄と思へ、親しき仲の疎きは神明も憎み給ふ事なれば、今より後互ひに怨むべからず、十郎殿は亂れ拍子の上手を承はる、一番舞ひ給へ、一ツは客人の爲め、一ツは祐經が祝ひの肴、君達も面白く候べし、早や疾く〜といふ、傍はらに控えました犬坊丸が噓し立てまするに依つて、茲で祐成が辭退に及ばず、持つたる扇をサツと開き、ヌツと立上つて

君が住む、龜の御山の瀧津瀬は

と一聲上げて暫時舞ひながら、千々に心を通はせて、兎やせん角やせまじと思へば思はるゝ、亂るゝ舞の手振、夜更けなば忍び入るべき道傳へ、茲より入りて彼所より廻らんか、彼所は詰り、此所は通ひ路、忍びて入らば音あらじ、入るとも知らじ差す腕、袖の返しに眼を使ひ、稍半時餘りといへるもの舞ひました、座敷に連なりました人々は、思はず知らず祐成の、舞の手振りに感に入り、ドツとばかりに賞めました、十郎の前にあつた盃に、祐經祐思ひ差し」といつて十郎に盃を

差す、祐成三度干しまして十、今宵は之に一宿いたし、宿直申したく候らへども、北條殿へ参るべき仔細の候へば明日こそ重ねて参るべけれ、お暇申す」と茲で暇を告げて表へ立出た祐成、跡で何をいふかしらんと思ひ、小柴垣に立寄りまして聞くとは知らん大藤内が、大「イヤ那の殿原の父を誠にお討ちになりましたか」祐「されば、我等持つべき所領を彼等の祖父に横領せられ、其上ならず女房まで取返された無念さに、郎黨に申付けて彼が父、河津の三郎といふものを討たした、人もや知つて候はらん、併し彼等は謀叛人の末にて、已に切られべきを、幼少ゆる助かつたる、世にも果敢なき者共なれば、何事をか仕出し申さん、彼等が分際にて、今此の祐經を狙ふこそ、誠に蟻螂が斧を振つて龍車に向ふが如く、笑ふに絶えた事でござる」之を聞いて大藤内が、大「イヤ夫はどうも以ての外の事でござる、世にある人は所領財寶に心を引かれ、思ふ事萬滞はるものなり、されど貧なる者は心の引かる所なし、さればこそ貧なる武士と鐵とは侮らぬものところ申せ、最前より察する所、彼のノ折々刃の柄に手を掛け、眼を四方に付けて候ふが、

某しは只ならざるふりと見て候」祐經さてく大藤内殿も心弱き事を宣まふものかな、彼等何ほどの事仕つるべき、龍は寝て本體を現はし、人は酔ふて本心を現はすとかや、盃上げて舞ひ狂ふもの、仔細候はじ、螢の火にては須彌は焼けることあるべからず、南無阿彌陀佛」と高らかに念佛を唱へましたが、偶然に唱へたやうなもの、後に思ひ合すれば、之が最後の念佛となつた、此方は祐成表に立つて承はり、無禮な事をいふ奴だ、走り入つて如何にもならんかと思ひしが、イヤく跡々にて弟時致が怨むであらうと思ふから、齒を噬つて拳を握り、空しく立歸つた、されば大藤内は今宵の夜討に逃げなば逃さんと思ひましたが、貧なる武士と鐵は侮られぬものだといふ、此の一言が非常に癪に障りました、されば祐經を討つて、二の太刀に此の大藤内の細首を打落さんと思ひ込んで立歸つた、口は禍はひの門、迂濶な事はいへませんもので、さて弟の五郎時致は、兄の歸りが遅うございませうから、間違へでもありませんかと、心許なく、表に佇んで居りまする處へ祐成が歸つて来た、十「嗚御待兼ねであつたらう」五「さればでござる、人

を待ちまするものは、何様に辛きものか」十「我等もさこそと存せしが、敵左衛門が館に呼び入れられ、酒を飲んで居つた」五「ハ、ア、夫はどうも便り悪ふございしました、如何いたしましたか」十「されば亂舞の折節飛掛らんとは思ひしが、御分と一緒にこそと存じて、堪へて参つた、心の中を押し量り給へ」五「さては左様でござつたか、御所存さる事でござる、併し夫ほどまでに心を盡し便宜能かりせば、我なれば討つべかりしものを、シテ祐經が館の様子御覽じ候らひけるや」十「言ふにや及ぶ、案内は能く見覺えて参つた、イザ其方へ物語らん」と扇をサツと押開いて、十郎が祐經の館の様子を事細やかに物語りまする、時致篤と承はりまして五「シテ兄上、客人とは如何なる人でござる」十「されば備前國の住人吉備津の宮の大藤内と申すもの、手越の少將、喜瀬川の龜鶴を呼んで酒宴半ば、呼入れられて祐成も舞ふほどの事成しつるに、面に當つて廣言しつる無念さよ、眞二ツと思へども和殿に命惜まれて、手に握りたる敵を許しつるこそ無念なれ」五「之れや寶の山に入りながら、手を空しうするとの事なり、嬉しくも堪へなされ

しものかな、今宵は餘し候べきならず、南無阿彌陀佛……といふのを聞いて十郎が心付いて「イヤ我等が歸りの折柄に外の方に立聞くに大藤内が我等が心中を見貫き、油断ならずといひしを、祐經大言して何程の事あらん、螢の火にては須彌山は焼けず、南無阿彌陀佛といったが、之を彼が念佛の唱へ終りならん、我々も今宵祐經を討つて大藤内を討たば、彌陀より外に頼むことなし南無阿彌陀佛……」と兄弟がいろ／＼と打合せ、茲で夜の更けんまで相待つても如何でござる、イザや和田殿の館へ參つて最後の對面をいたさんと、兄弟が打連れまして、左衛門尉義盛方へ參りまして、案内を乞ひますから、義盛が立出でまして「之は、能うこそ參られた、狩鞍の體、之が初めてにぞ候はん、誠に見物には上やあるべき、サア／＼之へ」といふと、祐成が扇を笏に取直して「參候、斯様な事は珍らしき見物、末代の物語りに、時致を召連れ二三日の用意にて罷り出でました、餘りの面白さに、斧の柄の朽つるを忘れまして、曾我へ人を越しましてござる、其程存じ參りましてござります」義盛之を承はつて、何條其儀のあるべきか、日頃の

本意を遂げんとする、一家の見果てに義盛に今一度對面せんとてぞ來りぬらんと心の中に哀れに思ひましたが「無思すらん、幾度見ても面白く、況して若き人々、さぞ／＼と思召す、嬉しくも來り給ふものかな、豫てより知り奉りなば、初めより申すべかりつるものを」と之から酒宴になりました、盃が二三度廻りました時に、義盛が「さて相構へて能くし給へ、仕損じなば一家の耻辱、後ろ楯にもなり申さん」といつて盃を差す、其の折梶原源太が館へ行つての歸り、耳の早い男だから之を聞き付けて「源、アイヤ何事でござる、和田殿、曾我の人々にせば能くせよと仰せられ候は不審の至り、御耳にや入れ申すべき」と一聲呼はつた、時に左衛門ハツと思つて、悪い奴が通り掛つたと驚ろいたが「ナニ梶原殿は何と聞かれて御耳に入れるとは宜まふぞ、此の面々は我等に親しき事は、上にも知ろしめされてござる、此度の御狩を承はり、お召しはなけれど末代の見物にせんと、忍んで御供仕つてござる、若者の習ひ、女共と遊び候らひしが、君相澤の御所に御入りと承はつて急いで參り候間引出物をいたさず、歸りは何にても

女共へ取らせんと申すゆる、道の物は耻かしきぞ、引出物せば宜くせよ、仕損じなば一家の耻ぞと申したるが、此事ならでは何申したりとも覺えず、急ぎ上へ御申しありて義盛を失ひ給へ」と聲高らかに吐鳴り付けた、源太景季赤面をして源之はシタリ、何とて和田殿は某がしに逢ひ給へば、よしなき事にも角を立て、宜まふやらん」といつて行き過ぎた態をしてソツと跡へ立歸つて、暫時佇すんで立聞きをして居る、夫を和田左衛門知らんから義「水を泳ぐ者は能く溺れ、馬に能く乗る者は落つるといふ、彼は我の言葉を信じて行き過ぎた」と申します時に五郎時致が「五」實に奇怪なる曲者でござる、御申譯を聞かずは彼の細首を打落さんと思つてござる」表の方に聞いて居た梶原源太が「源」何だと、俺の首を打落す、剛い事をいふ奴だ、尤も時致は朝夷の右に出る大力者、今茲で事を仕出來し、勝負をせんよりは、上様に申上げ、我等の力を用ひずして失なはん事、易かるべし、今に見よ」と表で態とエヘン、エヘンと咳拂ひをして足早に其所を通つた、此の咳拂を聞いて一同が南無三、扱は源太が表に居つた事かと大きに驚ろきまし

た、左衛門義盛が「義」今少しく物語りをいたしたいが、源太といふ曲者が御前へ参つて如何やうなる事を申上げんも知れん、相構へて仕損じ給ふな」と言ひ置いて、和田左衛門は頼朝公御前へ参りました、兄弟は館へ立歸つて夜の更けるのを相待つて居ります、十郎祐成が「十」先刻梶原源太が御身のいつた事を確に立聞きしたに違ひない、彼は知つての通りの者だに依つて、如何なる事を頼朝公へ申上げんも知れん、只今の中に館を歸られるやう」之を承はつて五「日頃は兎も角も、最早本意を達するに、源太などの者、何條何ほどの事のあらんや」義「イヤ、大事を遂げたる後なれば兎も角も、大事の前の小事、何事も我等に任せ給へ」と手早く支度をいたして己れは頼朝公御前へ行く、曾我の兄弟は歸つて了つた、此の事を梶原源太が讒言に及ばふと、御前へ出ると、左衛門尉が頼朝公とお話しを申上げて居る、之ちやア迎も讒言は出來ない、詮方なく、先刻五郎の言葉、我が細首を打落すといつた憎くい奴、宜し不意に押寄せて彼の首を打取らんと、百餘人の兵を従がへ、源太景季、曾我兄弟の館へ押寄せて見ると、更に一人も居ない、

シーンとして居る、源太之を見て大口開いて打笑ひ、源「日本一の卑怯者、口ばかりで何ほどの事が出来るものではない」と、廣言を拂つて立歸りました、茲に曾我兄弟が最期の遺書を認め、譜代の家來鬼王、團三郎を呼んで別れを告げるお話しは次回に。

第十八席 鬼王、團三郎の別れ

さて和田義盛の方より立歸りましたる曾我兄弟、最早此の世も今宵限り、此の暇に諸事心置なく取り片付けてと先づ十郎が「イザや時致、此の間に幼少より思ひし事を精しく文章に書いて曾我なる母人の許に参らすべし」五郎も「五郎然るべし」とて是れから兩人各文章を書きまします、三つや五つの折の事から書き始めましたから大きな巻物が二つ出来ました、其の手紙の中に十郎のは

我等五つや、三つの年より父の討たれにし事忘るゝ暇なく、七つ、九つと申せしには月の夜に出で、雲井の雁金を見ては父を戀ひ、明くれば小弓に小矢を

取り仇なぞらへ障子を射通し彼を打たん事を願ひしを、母の制し給ひし故、其の後は箱王と一と間に語りて一夜を明かし候て、人には今日まで云はざりし、富士野の狩に参りし折、箱根山に至りて時致が師の坊に一世の別れの折、五郎は友切の刀を賜り、我等には微塵丸の刀を賜ひたるが、後上より御尋ねあらば京の町にて買ひしと申せ、後に調べあらば別當が申し開くとの仰せなり、我等は今宵の本意には奥州丸の太刀を用ひ候覺悟に候へば、是れも上にて知り給ふ名剣なり、お咎めもあるべきか、併し元服の折取らせしと仰下され度候、我々命を捨て候は、御両親には御咎あるまじく、其故は五郎事は北條殿の烏帽子なれば、曾我の父上には御疑念は掛り申すまじく、萬一御疑念あらば和田、畠山の兩君へ頼みて、打てよとて太刀取らせしにあらすと、上へ申して給はり候は、御無事と存じ候

といふ、又五郎の手紙には

兄祐成殿は十三歳に元服し、我等は十一歳にて箱根山に登り候に、其年の十二

月末つ方に里々より衣裳音物取り添へて、餘の兒達には送れども、箱王が里よりは送り物もなし、況して父の文もなし、無きも理はり曾我の父上は御上京、眞の父は祐經に打たれ給ふて尙更に父を戀しく思ふ儘、夜々權現に参り仇を見んと祈りしに、程なく御前にて祐經を見初めし事神の引合せと存じ曾我へ逃下り候なり、十郎殿に語らふて北條殿にて男となり御勘當は給はりけれども常々命は過ぎし父上に奉りて回向となす覺悟いたし、毎日讀誦の御經は母に手向け奉りしなり、親子は一世の契りとは申せども之れを紀念にし百年の後、來世にて参り合ひ申すべし、

などいふ、まだく長い手紙でございますが、此の邊で大略をいたしますが、右の二巻の手紙をば、母滿江の許へ送らんと、鬼王、團三郎の兩人を呼びまして十郎が「十」さて汝等は我々の爲めには恩ある郎黨、今此所にて別るゝは心愛けれども止むべきにもあらざれば、是より急ぎ曾我へ立ち歸り呉れよ、此の小袖をば母上に参らせよ、馬鞍は曾我殿へ奉つり、能く申し呉れよ、我等も自然の時は御先途に

替り参らせんとは豫ねてより随分心掛け居りしかど、父の仇に志し深くして先き立ち申す事無念には存じ候へども、恐れながら二人の子供の形見とも御覽候らへ、五つや、三つの幼い頃よりして左右の御膝にて育てられ参らせし御恩忘れがたくこそ存じ候へと申し呉れよ、又肌の守りと鬢の髪をば二の宮殿に参らせよ、弟どもの形見に御覽じ候へと云ひ呉れよ、弓と矢とは汝等に取りらすぞ、亡き跡の遺品に見候らへ、鞭と甲掛とをば二人の舍人が方へやるべし、靴行躰は守り育てし二人が守兒に取らせよ、其方等も長く身貧なる兄弟に仕へぬること不便なれ、夜更ぬ間にはれを持つて落ち候へ」と形見の品々に巻物を取り揃へて渡しまするを團三郎承はつて團「是れは御無體と申す物なるべし、我等身不肖に候へども相模を出でしより自然の事候は君より先きに命を捨て、死出三途の御供とこそ存じ候に、下郎をば命惜む者と思し召し候ふや、唯何處までも召し具せられ候へ」と云へば鬼王も同じく鬼「假令由々しき御用にても立ち申さずとも命を捨つる志しまでの御供仕つる」と思ひ切つてぞ見えにける、十郎聞いて「十」各の思ひ寄る

處眞に神妙なり、汝等の如き者共に我々世に無ければ恩をもなさで別れん事の無念なれ、主従は三世の縁ありと聞く、來世にても必らず此の恩をば報すべし、只今生るゝは此の形身を悉く會我へ届けたらんには最期の勝りならん」と諭せば五郎も同じく五「汝等思つても見よかし、若し狩場に事出來ぬと聞えなば物思ふ子持ち給へる母は、我子供やらんと嘆き給はんに、急ぎ参りて此事斯くと申すべし、今は少しも疾く急げや」と勵ませば團三郎團「イヤ、何と仰せらるゝとも得てぞ歸り申すまじ、聞し召せ、君をば乳の内より某がしこそ取り上げ奉つりて九夏三伏の熱き日は扇の風を招ぎ、嚴冬霜雪の寒夜は衣を重ねて肌を温め參らせ、氣も心も盡し候ふ、月とも星とも明け暮れに見上げ候て、頼み奉つり、御世にも出でさせ給ひなば誰人にか劣り申すべきと、頼もしくも、いとおしくも思ひ奉つり今日まで影形の如く附添參らせたる某を落ちよとは御情なし是非に御供仰せ付けられよ」とハラ、と涙を流し嘆き悲しみまする、十郎ホト、困り心も弱く相成て見えまするを、五郎は如何にして歸さんものと存じまするから五「如何

に未練なり、君臣の體黙止がたしといへども、君の命する所に従はざるは臣の道とは言はれまじ、親の言葉にも背かざるを以て第一の孝行とせり、且つ遂に汝等と共に何日までも添ひ果つべき身にしもあらざれば、名残の惜しき事盡すべきにあらず、只々急いで參り候へ」と目に角立て、荒々しく申しますると鬼王居直り、畏まつて鬼「御言葉には候へども、某も母の胎内を出で竹馬に鞭を當て、より、君に附添ひ申し成人の今に至るまで片時も別れ奉らず、其の御縁にや大事に參り合せて力を出だせよとの仰せを蒙むらずして、只偏へに落ちよとの仰せこそ、誠に恨めしく候へ、所詮武運に拙なき我々捨てられ參らせて後何の爲めにか長らふべき、我等の身の果てこそ悲しけれ」と潜々と泣き出す、團三郎も堪り兼ねて團「御供申す命は何處も同じ事とよ、後れ先立つ道芝の變らぬ露のぬれ衣拂ひて御供申すべし」と諸肌脱げば鬼王も實に尤もなりと諸肌押し脱ぎ刺交へんとする有様、此の時に五郎時致、涙と共に言ひけるは五「誠に汝等が志、忠なる限り節なる心意、然れども我々が期程までに手を替へ心を盡し制するを聞かずして、狼籍なさは却つて忠

義は失せ申さん、假令命を捨つるとも故郷へ籠を届けずば長久志は受くべからず、一世の別れに怨を得て、夫れでも主従と申すかや」と宥め申すれば十郎祐成も「五郎能うこそ申したれ、浅間大菩薩も照覽あれ、我々の言葉を背くに於ては未來までの不興すべし、此の上は制するに及ばず」と日頃温和の十郎も面色變りて荒らかに申しける、茲で鬼王、團三郎死ぬるにも死なれず、血潮の涙を振拂ひに、御母上の御嘆きの程思ひやられて、今の別離に萬倍の嘆きの數と存すれば」と兩人其處に泣き倒れます、斯くてあるべきにもあらざれば兩人泣くく陣所を立出る、鬼王、團三郎が心の思ひは悉達太子が十九にて菩薩心を起し給ひ、檀特山に入りし時、車匿舎人が賜はりし駒の籠に倍増して、二匹の馬の鞍の上、空しき口を引く髪より返りく涙の雨の五月雲、晴るく道なき思ひにて、残す心に行く駒の、足並早やく思ひけり、茲に鬼王、團三郎の兩人は兄弟の人々の籠を預かり、富士の裾野井出の館を泣くく出で立ち、曾我の里へと志したるが、惜まるく名残に

心は跡に止まりて道の程に休らひ、富士野の方を願れば夜は次第に更け渡る、關に晁めく松明提灯入れ違ひ、走せ違つて見えければ團「鬼王殿あれ見候へ、井出の館と見え、萬燈會の如くなるは今こそ御大事なるらん」鬼「あの大勢が敵なりせば助かり給ふ事はあらず、御本意の程如何あらんか、御先途を見參らせたくも程隔たりぬれば叶ひ申さず」とて兩人聲を惜ます泣き出す、馬の嘶きの聲さへも悲しむ者かと推されて、又も涙にくれにける、扱て斯くてあるべきにあらざれば、遠近のたつきも知らぬ山中に覺束なきは富士野なる、泣くく空しき馬の口、故郷へとは急げども行きもやられぬ山道の末も定かに見え分かず、此の時に富士の裾野の方から、青竹の先へ状態を付けましたのを引擔ぎまして、一人足早にドンく飛んで參りました、團三郎眼早く之を見付け、其の者の袖を捉へ團「少々お待ち下さい、昨夜井出の館に於て何事かございましたか」彼の飛脚は之を聞いて、飛「さればでござる、まだ貴方は御存じないか、曾我の十郎、五郎の兄弟が、一族工藤左衛門を親の敵と討ちなすつた、剩さへ、御所に切つて入り、日本國の

武士が悉く切られないものはない、負傷死人凡そ二三百人もございました、だが兄の十郎は討死をし、弟の五郎殿は曉に及んで生捕られました」團「シテ御身は何れのお使でござる」○「イヤ喜瀬川の龜鶴さんから、大磯の虎御前へ知らせの使ひでござる」といつてドン／＼急いで行つて了つた、鬼王丸之を聞いて大きに喜びまして、豫て仕損じあらんかと思つたが、一期の大事如何とお案じ申したが、首尾能く仇をお討ちなされたは何よりも幸はひと、兩人茲に喜び勇んで一刻も早く會我へ參つて物語らんと駒の口を引きまして、道を急いで参りまする、お話し變つて兄弟は今思ひ置く事更になしと、茲で支度に及んで工藤の假屋へ忍び入り、仇討本懐を達するお話しより、名高い十番斬のお話し。

第十九席 狩場の切手

さて會我の兄弟は、鬼王、團三郎の兩人を會我へ歸して、今は後安し、イザや最期の出立せんと兩人身装に及びまする、十郎祐成が其夜の扮装は白き帷子の脇深く

かきたるに、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、一寸まだらの烏帽子掛を強く掛け、黒鞘巻赤銅造りの奥州の太刀を脊負ひたり、五郎時致は合の小袖脇深くかきたるを狩場の用意にやしたりけん、唐さゆみの直垂に蝶の二つ三つ所々に書きたるに、紺地の袴のく／＼りゆるやかに寄らさせ、袖をば結んで肩に掛け、ひやうもの烏帽子掛を強くかけ、赤木柄の短刀を差し、源氏重代の友切丸の一刀を脊負ひたり、兩人篋引結んで松明取つて出でにける、時は何時なん、建久四年中夏にて二十日餘りの八日の夜、降り降すみ五月雨の、あやめも分かぬ眞の闇、工藤が館を指して急ぎ行く、十郎祐成松明振上げて十「時致此方へ向候らへ、あかぬ別れの顔見せん」五郎「此の上は利那の暇もあるまじければ是れこそ最期の見參の限りならん」と兄弟互に松明を振上げてつく／＼と顔を打ち目成る、是れぞ兄弟逢ふ瀬の別れ、今生の暇乞ひと互に涙を浮べけり、五郎は心弱くて叶はじと五「今は是れまでなり御急ぎ候へ」と進むを十郎袖を控へ十「假屋の中には女共も多かりなん、太刀の振廻しに心付け候へ、罪造りにあやめ給ふな、後日の沙

汰も憚りあり五「承はりぬ」と兄弟足を早めて参ります、今宵の木戸の掛役當番は、稻毛の三郎、内から木戸を固めて居ります、兄弟如何して通るべきと、暫時立休らつて居りました處、内より之を眺めまして○「斯る夜更けに怪しき奴、殊に其の體、事がましく扮装たるは、通す事罷りならん」と聲を掛けましたから十郎が「十」之は苦しからざる者でござる、どうかお通しを願ひたい、○「イヤ何者なりとも通す事罷りならん、五つを打つて後は叶ふべからず、疾く〜罷り歸れ」十「イヤ御咎めあるまじき者にてござる、之は土屋殿より愛甲殿への御使ひでござる、どうかお通しを願ひたい」○「オ、左様か、然らば苦しうない、通らつしやい」と木戸を開けて通して呉れる、兄弟ホツと息を吐いて、一の木戸を通つたが、まだ木戸が二つある、如何して通るべき、事六ヶ敷く思ひながら足早に参ります、二の係役當番は、千葉介常胤でござります、木戸を相固めまして、番卒が數十人、篝火を焚いて居ります、兄弟木戸際へ來つて十「アイヤ御門をお頼み申す」甲「何だ、何者か知らんが斯る夜更け通す事罷りならん」五郎進んで

五「之は身内方の者でござる、苦しからず、お通しあれ」甲「ナニ身内で我等が知らぬ者はない、身内方の誰だ、苗字を申さつしやい」五「されば、我等は苗字もないものでござる、どうかお通し下さるやう」千葉介の家來が木戸を開けまして、情々と時致の顔を見て甲「身内方と申すが、遂に見た事がない、苗字を聞けば名乗らず、此奴怪しき曲者、身内方とは偽はりであらう、通す事罷りならん」と木戸を荒らかに閉切つて了つた、五郎に於ては木戸を閉てられまして、大きに怒つて五「アイヤ通つて差支へなき者なればこそ参たれ、苦しき者の振舞かな、止め立てなさば目に物見せん」と呼はると、番兵大きに怒つて○「ナニ、不届きな事を申す奴だ、夜番の固めは何の爲め、斯様な狼藉を固めん爲である、イデ討止めよ」と俄かに薙めき立つて五郎、心得たりと奇らば切らんと身構へました、十郎此體を見て大きに驚ろき、五郎を制しまして十「之は更に心得ざる者にて候、長南殿より長北殿へ大事の御物の具を取りに参るもの、夜更けに候間、人を連れて参り候、若き者にて酒に酔ひ、雑言を申し、只某がしに免じお許し候らへ」ニ

ツコリ笑つて穩やかにいふと、番兵が甲「イヤ然らばこそ不審なり、其の儀なれば縁故長南殿へ尋ね申すべく、夫まで茲に控へて居らつしやい」尋ねられては大變だから十郎大きに驚ろいて十「御分達は我々共を見知らざるか、長南殿の身内にて、彌源太、彌源次の兄弟、厩の者でござる、日外宇都の宮殿、北山へ御出の時見参に入つたりしを忘れ給ひしか」スルと多くの番兵の中に温従い士卒が前へ進み出ましたが、十郎の顔を情々と見て居る、祐成大きに弱つた、松明を傍へ廻し、目を少し眇めまして、妙な顔をして居る、此の者能く祐成の顔を見て居たが乙「ア、成程、思ひ出した、片瀬より關戸へお歸りの節にお目に掛つたやうに覺ゆる」祐成占めたと喜んで十「さればでござる、殿原は其時の酒宴の座敷一の狂ひであつたがお忘れであつたか」乙「如何さま其人であつた、さうく殿は我等を座敷一の狂い人と宣まへど、御分も仁王舞をば爲し給ひし」と打解けました様子に、傍はらに居りましたものが丙「何だ、そんなに知合の者なら仔細はない、急ぎの御使ひ通すが宜らう」甲「サアく苦しうない、お通し申す」スルト彼の

男が乙「イヤ茲にあはれ濁酒の一桶もあらば、如何なるお使ひなりとも、其許に仁王舞を所望いたすべきに」とカラく打笑ひますから、十郎も同じく打笑つて十「同じ心にてござる、さりながら後日又御目に掛るでござらう」と足早に其所を通りました、鰐の口を遁れたる心地、十郎が十「さて時致、斯る時は、如何にも詫るべきに、御分の雑言心得ん、古き言葉にも、事を臨て怖れる勿れ、小忍びされば大謀を亂るとか、大事の前の小事でござる、我ながら能くこそ言ひたり」五「之や富婁那の辯ならん」と兄弟足を早めて参りますと、三の木戸へ掛つた、今宵の當番は海野の小太郎行氏、最早君の御館間近だに依つて嚴重に二ツ雁金の幕を打廻し、番兵木戸を固めて居ります、モウ之から先は仔細ないと思ふから、兄弟兄弟「之は畠山の手の者でござる、所用あつて参つたり、お通し下さい」○「割符を持参いたしたか」十「如何にも持参いたしてござる」○「之へ出さつしやい」番兵が取上げて見ると、之は疎て畠山から貰ひ置いた割符、間違ひはございませぬから○「宜しい通らつしやるが宜い、後日仔細之ある時、申開きの爲

め切手は此方へ預かり置く、明朝島山殿へ届けるから左様思ひなさい、サアく通んなさい」兄弟「辱じけない」と兄弟が足早に茲を通つて之から大名衆の館でございまして、宇都宮彌三郎、荏原の三郎などいへる前を通ります、折節小雨が降つて居ります、殊には夜更け、咎める者もトンとない、兄弟大に喜こんで足早に参ります、向ひをキツと見てあれば、何者の館か、篝火を焚き立て、固めの兵數十人、長道具を持ちまして、誠に厳しく相見えます、何者の館なるかと近寄つて見れば、矢筈の幕を打廻し、梶原平三景時の館なり、之を見て十郎が「スワこそ一大事である、此の者こそ我々を能く見知つたり、如何いたしたものだ」五「されども行くべき道は他になし、命は茲に谷まつたり、運に任せよ」と兄弟が、心の中に箱根権現を一心に祈り、何卒無事に通し給へと、梶原が館の前へ掛つて参りました、所が神佛の兄弟を憐れみ給ふ所か、數十人の番兵が酒に酔つて打倒れ、高軒で眠入つて居ります「スワヤ仕合せ能きぞ」と兄弟が足早に打過ぎまして、已に敵工藤祐經の館の前へ出でました。

第二十席 討入

兄弟首尾能く三の木戸を打通り、敵工藤左衛門尉祐經の館の前へ出でました、兄弟顔を見合してニツコと打笑ひ、十八年の天津風、今吹返す嬉しさよ、さらば入らんといふ時に、十郎弟の袖を引いて「我等敵に出合ひなば、刹那の暇もあるべからず、今こそ最後の時なれば心静かに念佛せよ」五「然るべし」とて兄弟西に向つて合掌なし、兄弟「南無西方阿彌陀佛、親の爲めに捨つる命、浄土へ迎へ取り給ひ」と祈念して、纏て館へと打入りました、晝のほど能く見てありますから、座敷へ来て見ると這は开も如何に、人は一人も居ない、松明を上げて見てあれば、館も同じ館にして、座敷も同じ座敷なり、銚子土器取散し、晝の酒宴の其儘、次の一間を見ますと、多くの人の晝のほどの疲れ、酒に酔つて他愛もなく、高軒で寝て居りますが、祐經の姿は見えません、兄弟目と目を見合して歎息なし、無益の所に長居して、見咎められても詮なしと、力なく館を立出で、天を拜し地に

俯して十門能く武進の盡きたるか、諸神諸佛も見放し給ひたるか、今宵こそとは思ひしに、餘しぬるこそ口惜けれ、五才や三才の頃よりして、艱難辛苦の甲斐もなく、斯くなるべきと思ひなば、曾我へ人を歸すまじきものを、最早此上は詮なし。此の所に兄弟刺交ひ、悪鬼となつて取殺さん」と二人が茲に覺悟いたしました。

スルと茲に島山の身内に本多の次郎近繼、今宵夜廻りの當番、甲冑に身を固めまして此所へ廻つて來ると向ふの方に人聲が聞えた、ハ、ア扱は伊豆駿河の盜賊原が忍んで來たか、イデ討止めて功名にせんと、太刀の鏝元を二三寸寛ろげまして、足早に歩み寄つたが、不圖考がへたのが、待てよ、茲は工藤の館、若しや曾我の殿原が敵を討たんと忍びしにはあらざるかと、幕の透から見てあれば、案に違はず兄弟が、敵の行衛が知れんから、今や刺交へて相果んといふ様子、近繼悼はしく思ひますから、何にもいはず、扇を上げて塵いだ、兄弟之をキツと見て、何者ならんか、招ぐは仔細あるべしと、近寄つて見ると本多の次郎近繼、十之は本

多殿にて候か、次「シツ」聲を潜めた近繼が、次「夜陰の名乗り詮なき事、浪に揺るゝ興津船、知の山は此方でござると先に立つて案内をした、祐經が臥したる館の襖戸を秘かに開いて、扇を上げて塵がまして、小柴垣の内へ隠れて了つた、之はその夜廻りの當番でございますから工藤が館を替へました事が届けてあつたに依つて、本多の次郎が知つて居る、兄弟大きに喜んで、襖戸を開いて内に入り、座敷へ來つて見れば、案に違はず祐經は茲に臥して居ります、二人は顔を見合せてニツコリ笑つて、四邊を見ますると人も居ない、祐經は手越の少將と臥し、大藤内は塵を少し引退つて龜鶴と臥して居ります、今宵祐經が館を變たのは、大藤内が勧めたのだ、どうも晝の程十郎が工藤の座敷で亂舞をした折に、扇の下から見られた、其夜は俄かに館を變へ、宵の酒宴に前後も知らず打臥して居ります、此時に十郎が弟に向つて「和殿は大藤内を切り給へ、祐經は我等に任せますやう」五「這は恐なるお言葉かな、我等幼きより神佛に祈りしは、大藤内を討た

ん爲めならず、此の者は逃げなば逃がすべし、立合は切るべし、祐經をこそ千太刀も百太刀も、心の儘に切るべけれ、サア速やかに切り給へ、我等も切らん」と勇んで立上つた、スルと龜鶴も少將も初めから之を知つて居るが、餘りの恐ろしさに、ブル／＼と顫へて居ります。十「コレ汝等は聲を立てるな、那方へ參れ」と次の間へ押やりまして十郎は枕邊に、五郎は後ろへ廻つて兄弟で祐經を中に挟んで眼と眼を見合ひニツコリ笑つて十「三千年に一度花咲き實のる西王母が園の桃、優曇華よりも珍らしや、優曇華を拜みて手折るといふならば、夫れに譬ふる敵なり、拜みて切れや」五「切り候らへ」と兄弟刀を祐經の上に當て、引く眞似をした、何の事はない、猫が鼠を取つたやうな鹽梅、時に十郎が十「寢入つたものを切るは死人も同様、起して切らん」と太刀の切先を祐經の胸元へ差し出し、大音を揚げまして十「如何に左衛門殿、晝見參に入り候祐成、兄弟にて參つたり、我等ほどの敵を持ちながら、何とて打解け臥し給ふぞ、起きよ左衛門、眼覺よ祐經」と呼はつた、之が仇討の故實だといふ事で、祐經寢耳に之を聞いて、心得た

りとガバツと起上りながら、枕許の太刀を取らんとする所を、やさしき敵の振舞かなと、バラツと切込む一刀に、左手の肩から右手の脇の下まで切り下げた、アツと倒れる處を、五郎が同じく切込んで、腰の上手を刺しました疊板敷を切通して框までも打ち通つたり、理はりなるかな源氏重代の友切丸、何かは以て堪るべき十「五才三才より願ひしは此の事ぞかし、無念を晴せよ時致」五「晴し給へや兄上」と三刀づゝ切りました。

此の物音に驚ろいて目を覺ました大藤内、ビックリ仰天、床から這ひ出して逃げ出した、黙つて行けば宜いのに逃げながらに大「ヤア人々を見知りたり、後日に争ふ事勿れ」と吐鳴りながら逃げた、十郎此の時に追駈け來つて十「晝の言葉に似ざるものかな、逃げんとて逃しはせじ」と左りの肩より右の乳の下へ掛けて二ツに切つて落した、五郎も同じく高股二つに切つて落しました、四十の男が四ツになつて相果て了つた、スルと五郎が之を見て

馬は吼え牛は嘶くさかさまに

四十の男四ツになりけり
 と詠んだ、之を聞いて十郎が「能く仕つた、一期詠じても之ほどのは詠めまい、秀歌に於ては時致と召されなん」と今は憚かる所なしとドツと高笑ひをいたして、兄弟門を出でましたが十郎立止つて「祐経の止を忘れた、止は仇討の法、實檢の時に止がなければ敵を討つたるにあらずと聞く」五「さらば止を刺し候はんと元の座敷へ引返して取りて押へ五「御邊の手より賜はつた此の刀、今返しぬるぞ、確かに受取り給へ、受取らずと論じ給ふな」と柄も拳も通れくと刺しましたるから、口と耳と二ツになつて了つた、されば後に人が祐経が晝間悪口をしたから口を裂かれたのだと噂をした、十郎此時に「最早思ひ置く事更になし、さらば之より祐経が一族兄弟を怨まんとして出で申さん、尋常の立合して最期を天に任すべしといふから、五郎も五「仰せにや及ぶ、イデ名乗り給へ、我等も名乗り申すべしと、玆で兄弟が名乗りを上げ、十番斬に相成りますが、一息いたして次席に申し上げます。」

第二十二席 十番斬

玆に曾我の兄弟は工藤祐経を討ち取りまして假屋の外に立出でましたが、今は思ひ置くこと更になし、人々に知られん物をと兩人大音を揚げまして兩「遠からん者は音にも聞け、近からん者は眼にも見よ、伊豆の國の住人伊東の次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致として兄弟の者、君の家形の前にて親の敵、工藤左衛門の尉祐経を討ち取つたり、祐経が一族又は朋輩の仇と思へる者は打ち止めて功名せよや」と代るゝに數度名乗かけましたが、東西南北板家をならず五月雨のみ、外に音もなかりける、三浦の假屋はツイ側にございしますが、是れはトント初めから存じて居りますか出て來ない、其次の秩父に於きましたは、榛澤、岡澤等の面々を始めとして臣徒の人々出でんといたしまするを、重忠が推し止めて必定曾我の殿原本懐を達すると覺ゆるぞ、心易く致させ候へ、面々鎮まれくと鶴のト聲に一人も出る者はございませぬ、斯くて一人として出で來る者がな

いに依つて十郎祐成「十」五郎此の上は一と先づ此の場を落ちて今一度會我に歸へり、母上に對面いたし思ふ事をも心ゆく程に語り自害なさんは如何に」と言へば五郎大きに制し「五」這は以ての外御事かな、何條此期に及んでさる女々しき振舞なさん、速やかに御覺悟はしあつて然るべし」と此處で然らばと更に覺悟を極め刀の目釘の續かん限り斬つて捨てんと待ちかけたり、此の時喜瀬川の龜鶴が聲を揚げ「屋形の中に狼藉者あり、祐經も討たれたり、大藤内も討たれたり」と聲々に呼ばはりました、承はつて驚ろき覺めたる祐經の郎黨「さてこそ夜討は會我の人々にやあらんずらん、ソレ討ち止めよ」と俄かに騒ぎ立てたる事にして、鎧一領に三人、四人取付いて引合もあり、繋いだ馬に打跨がつて、一ト鞭吳るゝ者もあり、又は地震と間違へ走り出るもあり、祐經が恩顧の郎黨八幡の六郎を始めとして十人餘の者ども、祐經の寢所に來つて見れば見るも無慘な空しき死骸、何者なれば斯く狼藉いたす、敵は何所へ逃去つたるぞ名乗れ」と大音に呼ばれば承はつたる五郎時致「五」狼狽たる者其の振舞かな、會我の兄弟父の敵を討つて

此の處に控へたり者共來れ」と大音に答ふれば、スワこそ會我の人々遁さじ者とあつて討つて出るを、眞先きに立つたる一人、五郎が振り翳す友切丸の光りに水も堪らず首打ち落されて死んでけり、續いて掛るを右手左手、三人五人一刀に打つ放す、十郎も同じく前後に敵を引き受けて一人も免さず打つ放す、八幡の六郎之れを見て主の敵免さじ者と討つて掛るを、十郎手許に飛び込んで肩先より乳の下まで袈裟掛けに打つ放す、都合十八人まで斬り伏せたり、名にし負ふ二位殿の假屋間近の事なれば騒ぎは次第に擴がつて大小名の假屋々々、一同の人々皆立ち出で、狼藉を取鎮めんといたす、其の中に平石馬之介は第一番に走せ來り、兩人を見るよりも平「何者なれば君の御前にて狼藉を致す、名乗れ」と呼はつたり、會我の人々之れを聞いて「以前名乗りつれば聞きつらん、汝は如何なる者ぞ」平「我こそ武藏の國の住人平石左馬之介なるぞ」十「是れこそ會我の兄弟なり、敵工藤を討つて出るぞ止めよ」と冷笑つて云へば平「斯る無法者にこそ、目に物見せん」と切込み來る、十郎心得たりと受け流す鋒先鋭ければ、口にも似合はず平石はよ

るほひながら逃げ出すのを飛び込み來つたる十郎、押付の外れかひがね掛けて打ち込んだり、右馬之介斬られながらも命あつての物種なりと、太刀を杖に逃げて行く續いて愛甲の六郎是に在りと打つて掛かるを、五郎時致カラ〜と打ち笑ひ五「御分達相手には不足なれども今は人を選ぶべきにはあらず、時致が手練を見よや」と切先より鰐元まで血に染みたる友切丸真甲に振撥して飛び掛る、薙刀取つて愛甲の六郎二打ち合はせました、五郎の打ち込む太刀を受け損じ、左手の肘打ち落され青くなつてぞ引いたりける、第三番に「駿河の國の住人岡部の三郎向つたり、出で合ひ候へ」と名乗つて出で來るを十「祐成是れにあり」と打ち合はす、岡部の打ち込む大薙刀を十郎心得たりと身を落し一聲叫んで切り上げれば、薙刀は二つになつて左手の中指二本まで切り落したり、岡部の三郎這は叶はじと御所御番の内に逃げ込んだり、逃げながら三「敵は二人ならではなし、甚くな騒ぎぞ」と大音に呼ばはれば人々聞いて「天晴、物見にこそ、流石岡部殿よ」とドツト訃りに笑ひたり、第四番に現はれ出でたるは、遠江の國の住人原の小次郎なり、焦つて切り込むを五郎引ツ外して切り込めば、小次郎開きの遅かりけん、兜の眉底切り下げて鼻柱をば落されたり、原の小次郎ではなくて鼻の落郎でございませす、五番に御所の黒彌吾を知らずやと切り込むを、物をも云はず十郎が切り出す切先に黒彌吾小鬘を切られて駆け出す、六番に伊勢の國の住人、加藤彌太郎と名乗つて打つて掛る、五郎心得たりと上段下段と打ち合ひ、加藤がたじろく處を二の腕かけて切り落す、七番に駿河の國の住人船越の八郎取り結んで切り掛る、面倒なりと引つ拂ふ祐成の太刀先に高股斬られて引たりけり、八番に大音上げて海、我こそは信濃の國の住人海野の小太郎行氏なり」と名乗つて出るを、五郎聞くより望む所の敵なれと打合はす、兩人火花を散らして戦ひしが、流石に行氏名ある武士なれば暫く怯まず打ち合ひしが、五郎の一刀端なく行氏が膝頭へ切り込んだれば、小太郎横ざまにぞ倒れたり、九番に伊豆の國の住人宇田の小四郎押し寄せて十郎と渡り合つたが、小四郎の首は忽ち宙に飛び上る、此の人今年二十七歳憐れと三ふも思かなり、十番に日向の國の住人白杵の八郎とて薙刀取つて、足を拂は

るほひながら逃げ出すのを飛び込み來つたる十郎、押付の外れかひがね掛けて打ち込んだり、右馬之介斬られながらも命あつての物種なりと、太刀を杖に逃げて行く續いて愛甲の六郎是に在りと打つて掛かるを、五郎時致カラ〜と打ち笑ひ五「御分達相手には不足なれども今は人を選ぶべきにはあらず、時致が手練を見よや」と切先より鰐元まで血に染みたる友切丸真甲に振撥して飛び掛る、薙刀取つて愛甲の六郎二打ち合はせました、五郎の打ち込む太刀を受け損じ、左手の肘打ち落され青くなつてぞ引いたりける、第三番に「駿河の國の住人岡部の三郎向つたり、出で合ひ候へ」と名乗つて出で來るを十「祐成是れにあり」と打ち合はす、岡部の打ち込む大薙刀を十郎心得たりと身を落し一聲叫んで切り上げれば、薙刀は二つになつて左手の中指二本まで切り落したり、岡部の三郎這は叶はじと御所御番の内に逃げ込んだり、逃げながら三「敵は二人ならではなし、甚くな騒ぎぞ」と大音に呼ばはれば人々聞いて「天晴、物見にこそ、流石岡部殿よ」とドツト訃りに笑ひたり、第四番に現はれ出でたるは、遠江の國の住人原の小次郎なり、焦つて切り込むを五郎引ツ外して切り込めば、小次郎開きの遅かりけん、兜の眉底切り下げて鼻柱をば落されたり、原の小次郎ではなくて鼻の落郎でございませす、五番に御所の黒彌吾を知らずやと切り込むを、物をも云はず十郎が切り出す切先に黒彌吾小鬘を切られて駆け出す、六番に伊勢の國の住人、加藤彌太郎と名乗つて打つて掛る、五郎心得たりと上段下段と打ち合ひ、加藤がたじろく處を二の腕かけて切り落す、七番に駿河の國の住人船越の八郎取り結んで切り掛る、面倒なりと引つ拂ふ祐成の太刀先に高股斬られて引たりけり、八番に大音上げて海、我こそは信濃の國の住人海野の小太郎行氏なり」と名乗つて出るを、五郎聞くより望む所の敵なれと打合はす、兩人火花を散らして戦ひしが、流石に行氏名ある武士なれば暫く怯まず打ち合ひしが、五郎の一刀端なく行氏が膝頭へ切り込んだれば、小太郎横ざまにぞ倒れたり、九番に伊豆の國の住人宇田の小四郎押し寄せて十郎と渡り合つたが、小四郎の首は忽ち宙に飛び上る、此の人今年二十七歳憐れと三ふも思かなり、十番に日向の國の住人白杵の八郎とて薙刀取つて、足を拂は

んとするを、五郎飛び上りざま、打ち下ろす太刀先に八郎憐れや唐竹割になつたりけり、遂々會我兄弟の爲めに打たれたる武士是で十八、之を會我の十番斬と申します。

第二十三席 兄弟の最期

頃しも五月二十八日の夜、闇さは闇し、降る雨は車軸を流すが如く、陣々の松明提灯一時に消えて眞の間、何れを何れと見分難く、會我の兄弟は小柴垣を後にして出合頭に斬つて落し、引退いて敵を待つ、名乗つて出ては斬つて捨てれば、手に立つ者ぞなかりける、十郎最期を急ぎしかば聲張り上げて「武藏、相摸の若者共は如何にせしぞ、是れも重代、是れも重代と思ふなり、太刀と刀の鐵の程見せよかし、敵は十人と後日に沙汰いたされな、我等兄弟ばかりなるを火を出されよ、其明にて名乗合はん無下なる者共かな」と呼ばはつたり、御厩の舍人徳武と云へる者、傘に火を掛けて投出すを見るよりも、屋形々々より我れ劣らじと傘簀

笠に火を點けて投げ出す、其の外二千軒の館より、松明提灯を出しましたれば、宛然萬燈會の如く白晝よりも明かなり、人々立ち出で、見るに小柴垣を楯に取つたる會我の兄弟は兩人共に紅に染みて立つたりけり、斯る所へ緋絨の腹巻して薙刀取つて走せ出だし、荒「我こそ武藏の國に人も知る新合の荒四郎なり、敵は何人もあれ、我は只一人なり、一騎當千とは我が事ぞ、何所に居るぞ野武士は、曲者は」と悪口雑言暗きに暗いて進み來るを見るより十郎が「十、やさしくも聞ゆる者かな、大言吐いて逃げ給ふな、言葉は主の耻辱を知らすと云ふぞかし」と上段に構へける、荒四郎立合たる十郎が必死の權脈に恐れ震へ出して御免あれと云ひながら、横飛に逃げ出だす十郎「十、ヤア緋絨しの腹巻こそ目立つなり、返せ」と呼ばはり、追駈ける、荒四郎逃げ場に困り小柴垣を破つたるを十郎追付いて尻を突くと、荒四郎四ノ這ひになつて逃げ込んだり、續いて白糸の腹巻して鐵棒を小脇に掻き込み「ヤア君の御前にて斯る狼藉をなすは何者ぞ、名乗れ」と進み來る、五郎時致聞くよりも五「事新らしき問ひさまかな、會我の兄弟仇討して出でたりと

幾度か言ふべきぞ、逆上せて耳が潰れしか、親の仇は所を嫌はざる者ぞ、さて汝は何者ぞ」次「是れは甲斐の國の住人別野の別當の太夫が次男別野の次郎忠光なり、早や御細を受けよ、生捕吳れん」五「さては汝は盗人よな、三坂片山塚阪東に籠り居て、京鎌倉に奉る年貢物の具を遠矢に掛け追落しする臆病者、夜討の市に込み入つて寶を得るは知りつらん、由ある武士の晴の勝負は始めてならん、時致致へて取らせん」次「ヤア言つたりな夜討の賊とは汝が事よ」と鐵棒振上げる、下す暇なく時致に高股切られて犬這ひせり、十郎祐成は新合の荒四郎を追つて引返す、出合頭に安房の國の住人安西の彌七郎と名乗つて斬つて掛るを、下段に取つて打ち笑ひ「十」如何に彌七、人々の面もふらず討死せしを見つらんに、愚人は銅を以て鏡となし、君子は友を以て鏡とす、引くな安西、逃ぐるな彌七」彌七「言ふにや及ぶ」と打ち合はす、十郎足を踏違へるば目に掛つて丁と斬るに彌七が肩先より高紐の外れへ切り込んだり、引き退くとは見えしかど是れも其の夜に死しにけり、總て二人が手に掛り五十餘人を斬られける、手負は二百を越えたりけり、又もや降り

増す五月雨に松明一時に消え盡し、如法暗夜の有様にあれよくと云ふ許り、名乗つて出る者もなし。

茲に五郎時致は黒利の五郎が進み來るに渡り合ひ、二打ち三打ち合ひましたが、同人が叶はぬと見て逃げ出したのを、追つて何所までもと追つ詰め十郎に引分れて荒れ廻はる、此方は十郎祐成、一息入れて立つたる所へ伊豆の國の住人仁田の四郎忠常、崩黄緘の鎧に小手脛當嚴重に大太刀取つて走せ來り、四「如何に曾我の殿原、四郎忠常上意にて向つたり、出で給へ」と呼ばつたり、十郎之れを聞くよりも十「さては仁田殿にや、御分と祐成は正しく親類なり、互ひに後ろばし見せ給ふな」四「言ふにや及ぶ、忠常が太刀無道と怨み給ふなよ」十「我れ清らかなる死を急ぐと雖ども未だ骨ある人に出合す、言ひ甲斐なき雜人の手に掛り死せん事かと存する所に御邊に逢ふこそ嬉しけれ、我首取つて一族の好みとこそ思はれよ」と雙方劣らず去らず打ち合しが、十郎の太刀寸延なれば一の太刀は仁田が小鬘のあたりを切り下げる、四郎も之に怯む氣色もなく踏込みく切り結ぶ、十郎が二の太

刀は小肘を丁と切り付けました、忠常今は一生懸命、富士野に屍を曝すとも一步も引かじと切り結び、互ひに勇氣の切先は火花を散らして物凄じく、時を移して戦ひました、さりながら十郎祐成は多くの敵を討つたれば、自然染みに染んだる大太刀の血汐の傳つて柄元は手の中繁く廻りますれば、太刀を平目に打ち込みました、ガツキと受けたる四郎が又、小手振ひして十郎が太刀は鏝元よりボツキとばかりに折れました、柄投げ捨て、小刀の抜手も見せず、忠常が膝頭に切り込みます、引つ違へて仁田が切り込む一刀は十郎祐成が肩口切つて高股へぞ割付ける、さしもの祐成も此の痛手に思はずドーと尻居に座し起きも上から見えませんでしたから、四郎は何思ひましたか其の儘血振ひして行かんとする、此時十郎聲を掛け「ヤレ待て仁田、何所へ往ぞ情けなし、首打つて持て行かれよ、親し者さでありながら、など祐成が首級上への見参には入れ給はぬ、返せや忠常、戻れや四郎」と呼ばりました、之を承はつて四郎忠常は立歸り「昨日の味方は今日の敵、道ならねども忠常が介錯して參らせん、残すべきことあらば言ひ置きて自殺せよ、傳へ參

らせん」十郎嬉しげに「此期に及んで未練なし」と云ひながら一聲高く「如何に五郎、今祐成は忠常殿の手に掛り冥途の先駆いたすなり、汝は早く鎌倉殿の御前に至り兄弟が幼少の事共一々申し上げて死に候へ、死出の山にて待ち申さん、追つ付き給へ、南無阿彌陀佛」と腹に微塵丸の一刀を突き立て頭を伸べて討たれました、忠常は首級を提げて四一人々聞き候らへ、仁田の四郎忠常こそ、會我の十郎祐成を討ち取つたり」と呼ばはつたり、茲に會我の五郎時致は黒利の五郎を追ひましたが、兄の討たれたり云ふを聞き、五郎を追ひ捨て宙を飛んで引返へす、出合頭に東條七郎「セ」逃げやうとて逃がしはせじ」と斬つて掛るを「五」さしつたり」と引拂へば七郎が太刀を斬り折りました、這は叶はじと逃げ出す七郎を後袈裟に打ッ放つ、兄の敵と東條九郎が組付くを左りに上帯引摺む、途端に踏み込む行方の四郎を目掛け片手投に投げつけました、兩人目眩みて落命に及ぶ、鐵棒を持つて打つて掛るは柏木の五郎、十人力でございますから常に十二貫目の鐵棒を杖にすると云ふ強力、時致心得たりと引ッ外すし、空を打たして打ち込む太刀、草摺切つて太

股へ三寸ばかり切り込みました、弟の六郎兄の大事と見えたるゆる、薙刀取つて切つて掛るを右へ拂つて長刀の半を斜に切り捨てました、兄弟一つに組付くを五郎刃を投出し飛んで火に入る夏の蟲堪へて見よやと兩人が、襟元掴んで宙に差上げエイツと一聲兩人の目玉は四つ飛び出しました、時致最早や寄來る者もございませんから兄の死骸の側に参りますると、憐れや祐成は生年二十二才、建久四年五月二十八日裾野の露と消えました、最とも無慚の有様に兄の死骸に取纏りまして五「兄上死は諸共と約せしを、扱は此の太刀の折れ、之は仁田に後れ給ひしよな、時致只今御供せん待ち給へ」と自殺なさんといたします、所へ碓水の與市といふ者が集りまして、ヒツソリとして誰も居ない様子に、さては十郎が討たれたので、氣後れがして五郎は落て了つたと思ひますから、茲ぞ力む所と、大音に與「五郎は何所へ行つたるぞや、兄が討たるゝを見捨て落たるか、未練なり、引返して勝負せよ、斯くいふ某がしは鎌倉殿の身内にて大豪の勇士、碓水の與市といふものなり、返せ〜」と呼はつた、イヤ之を聞くと時致、怒り心頭に燃え上り、

太刀取直すと見えたるが五「ヤア與市、兄祐成が討たるゝを見捨て何所へ落へべきか、兄は仁田の手に罹れり、時致を和殿が手に掛けて首を取れ」といひながら飛掛つた、與市ビツクリ仰天、南無三まだ居たかと搔潜つて逃げ出す五「汝、逃げやうとて逃すべき、言葉に似氣なき卑怯者」と追駆けた、與市今は危急の場合でございませぬから、他へ逃げては往けないと、御所を差して逃込んだ、時致引續いて跡より入る、其の有様、例の友切丸を引提げ怒れる兩眼血走り、髪逆しまに立つて、天魔々神の暴れたるも斯くやとばかり、御前仕候の面々一同に立上り、奥へ逃げ込みました、此時御側にあつたのが、相模國の住人大友左近將監の嫡子、一房子丸といふ、生年積つて十三歳になる、たつた一人控えた、頼朝公お怒りになつて、憎くき所の振舞なりと自身立出でやうとすると一房子丸がお袖を控へまして「君日本國を座ながらにして従がへ給ふ貴とき御身にありながら、御自身御手を下し給ふは如何あらん、大方は若き殿原が醉狂か、又は女の益論か宿論に候ふべし御座あらせながら聞召され候へ」とお諫め申上げた頼「實にも」と仰

しやつて思召し止まつた、後に御恩賞に與かつたといふ、御所の五郎丸、此の者が
 力七十五人力ある、今碓氷の與市を追駆けて、御所へ時致が走せ入つたのを見て、
 女と見せて生捕らんと、衣を被つて待つて居た、所へ時致が飛込んで来て、ヒヨ
 イツと見たが、兄の言葉に、女には眼を掛けるなといふ言葉がある、摺れ違ひ
 さまに一當當て、行き過ぎる、五郎丸はやり過ぎて後ろからウーンと組付いた、
 南無三さては女ではなかつたかと、ズル／＼と二三間引摺つた、五郎丸叶はじ
 とや思ひけん、大音に 五郎丸「敵をば五郎丸組み止めたり、居り合へ人々、町内
 の人は居ないか：」真逆そんな事は言はなかつたらうが、聲を限り吐鳴つたの
 で、之を聞いて十四五人走せ來つたが、物ともいたさず引摺んでは人礫、或は蹴
 倒し投げ倒し働らきました、假屋の事、板敷を踏碎いて足を突込んだ、所を御
 厩の小平次といふ者が縁の下に隠れて居て時致の足を捉まへる小「ヤア／＼御厩
 の小平次が縁の下にて片足を生捕つた：」足を生捕る奴もないもんだ、一生懸
 命になつて押へて居る、之では如何に鬼神でも叶ひません、遂々茲に捕はれとな

りました。
 夫に依つて御所の騒動は一方ならず、頼朝公へは五郎時致を生捕つた由を申上
 げる、足の十郎は仁田四郎が討取つたと知らせた、ソコで先づ五郎は縛つた儘に
 いたして、明る二十九日の早天、頼朝公和田、梶原の兩人をお召出しになりました、
 昨夜の事をばお尋ねになる、茲で和田義盛が取調べて申上げる、頼朝、時致を御
 前へ召してお尋ね、時致一伍一什を審かに申上げましたるから、頼朝公殊の外御
 感心、手許に於て召使ひたいが何分左様ならん、不便ながら其方を誅さんければ
 ならんと、遂に其の翌朝遂々時致は松ヶ崎といふ所で首を切られました、併し兄
 弟の志ざしを頼朝公深く御感心になつて、懇ごろに菩提を吊ふ事になり、建久八
 年駿河國の住人、岡部權頭に造營奉行を仰せ付けられ、會我明社大明神と之を神
 に祀め、神靈今に至るまで著けく、富士の裾野に、其の美名富岳と共に萬世に輝
 き渡る、伺ひ續きました會我物語、此外にも大分洩れた所もございしますが、先づ
 概略此の邊で大尾といたします。

曾我物語 (をばり)

明治四十四年六月七日印刷
明治四十四年六月

不許複製



編輯者
柴田 蕉

東京市京橋區南紺屋町十八番地



小川寅松

東京市小石川區久堅町百八番地

荻原勝次郎

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者 博文館印刷所

發行所

東京市京橋區南紺屋町十八番地

尙榮堂

振替口座四〇貳貳番

講談叢書

柴田 薰口演

美談 曾我物語

桃川 如燕口演

荒木 又右衛門

小金井 芦洲口演

佐倉 宗五郎

寶井 馬琴口演

毛谷 村六助

一龍齋 貞山口演

大岡 政談 村井長庵

以下續刊

各册

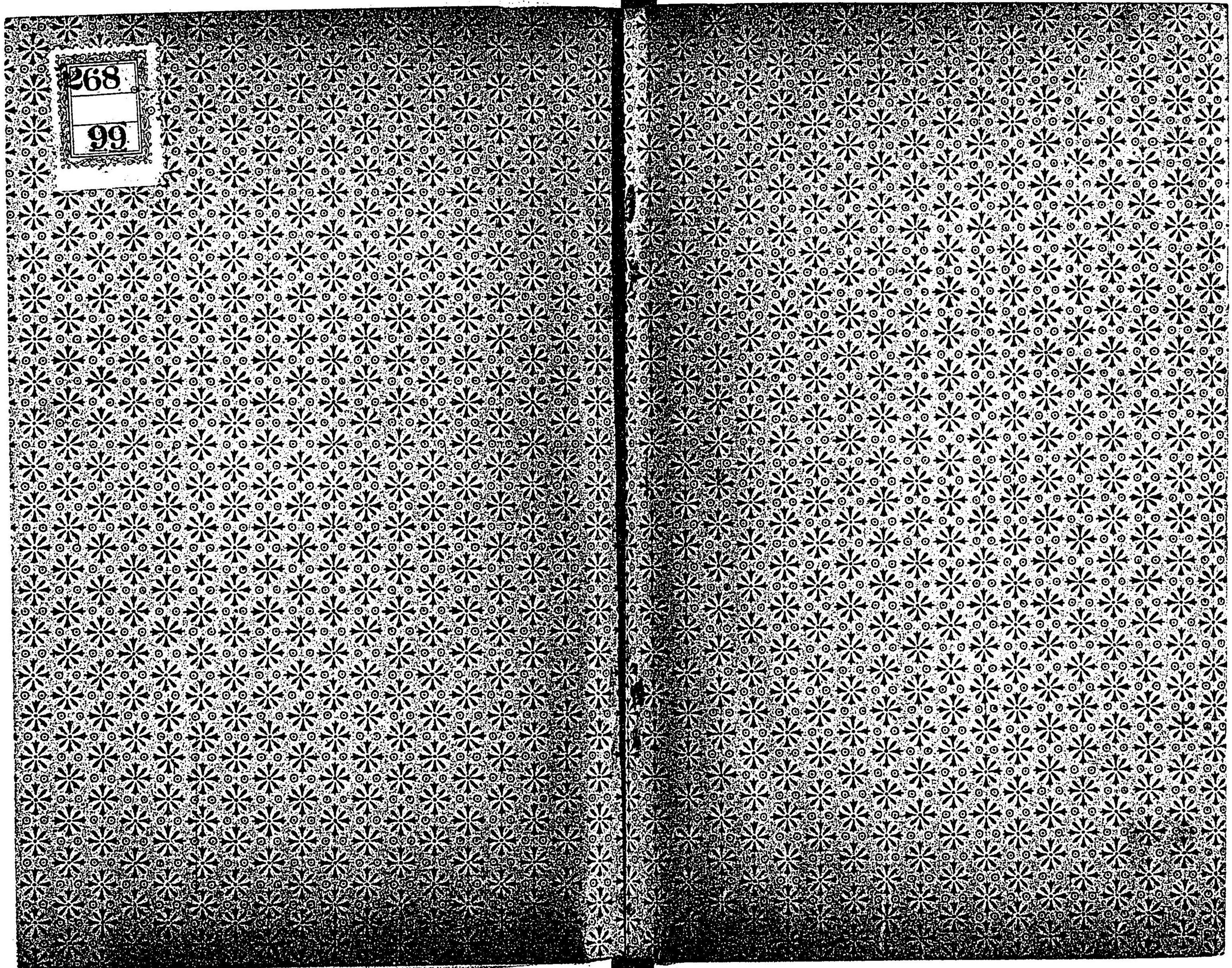
四六判三百頁洋裝美裝口繪插入
每月一册發行
定價各册金四拾錢 郵稅六錢

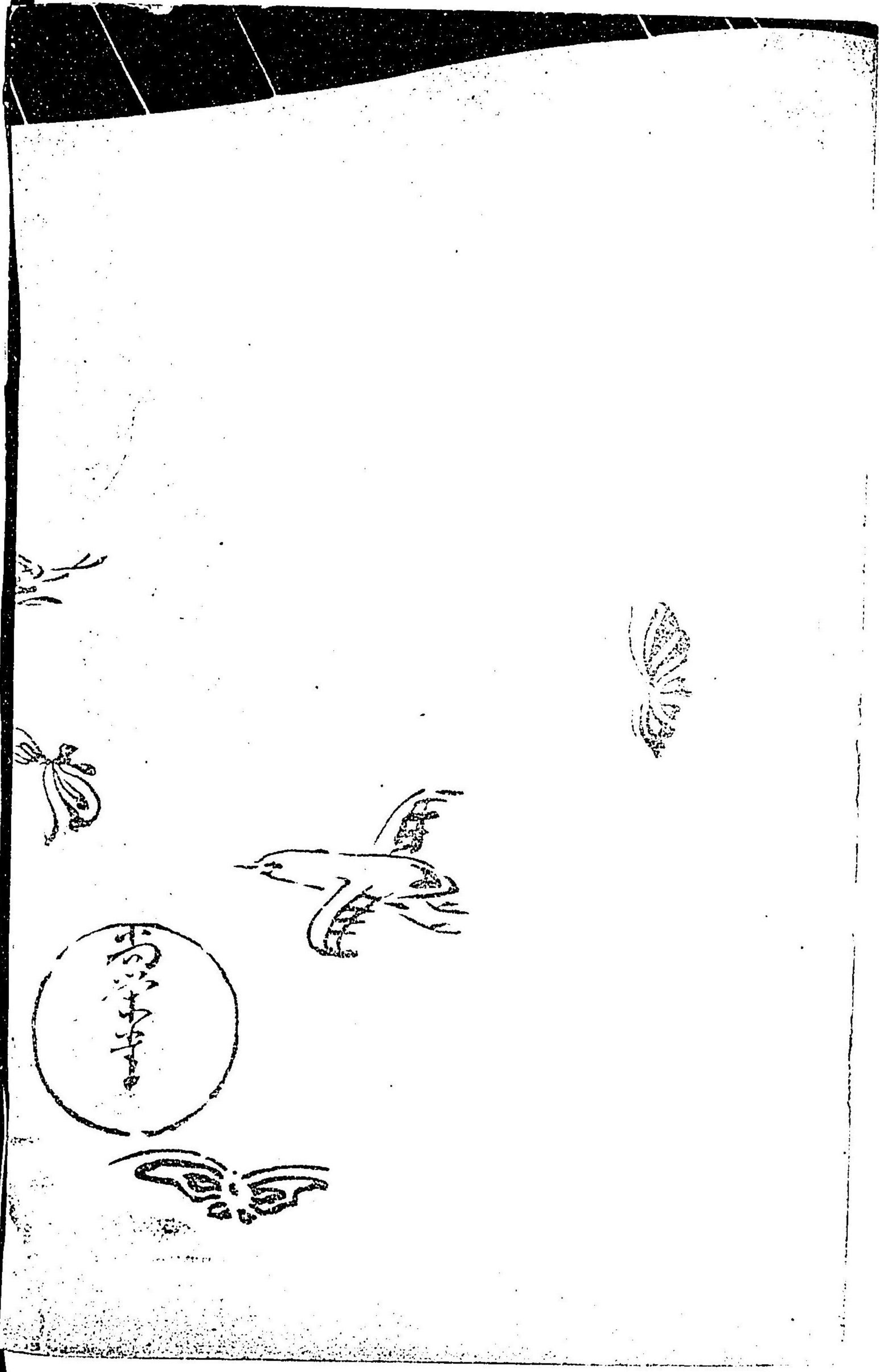
東京京橋區南紺屋町十八(振替東京四〇二二)

尙榮堂發行

268

99





曾我物語

柴田薰口述



097278-000-1

特12-456

曾我物語(復讐美談)

柴田 薰/講演

M44

DBS-1121

